

日本手話における「かな文字由来」表現の音韻パターン
馬場博史（関西学院大学非常勤）
松岡和美（慶應義塾大学）

研究の背景と目的：日本手話にはかな文字に基づいた指文字が存在する（図1）。これらの指文字はネイティブサイナー（手話を母語とするろう者）により一部の手話表現に取り入れられている。しかし、指文字を借用して新しい手話表現を作成し、通訳養成の教材に含める国内の団体による活動は、ろうコミュニティの批判対象となっている。それらの「新造手話」の多くがネイティブサイナーの言語的直感にそぐわないからである。アメリカ手話の借用語に関する研究では(Padden 1998, Brentari and Padden 2001) 指文字を一部取り込む形で新しく創られた手話表現は、母語話者が長年用いてきた手話表現と同様の音韻的制約に従うことが明らかになっている。本研究は、かな文字由来の手話表現の音韻的特質を記述する試みとして、身体的接触と位置の関係を取り上げる。複合語の形成における音韻変化に身体的接触が影響することは先行研究で指摘されている (Liddell 1984)。

研究の方法：手話音韻論の知識があるネイティブサイナーが36のかな文字由来の手話表現をまとめたリストを作成した。他のネイティブサイナーはそれらの表現を自ら表出しながら、身体的接触（手と手、手と体）が必要か否かを判断した。

観察されたパターン：調査結果は以下の通りである。(1)両手手話はバチソンの2つの制約 (Battison 1978) に従う。両手の手型が同じ場合は、両手とも同じ動きか対称的な動きをする。このような場合、身体的接触がある場合とない場合がある（図2）。それに対して、両手の手型が異なる場合は、非利き手の制約にしたがい、身体的接触が必要となる（図3）。(2)片手手話の場合は、身体的接触と位置との間に関連性が見られた。あごより下で表出される手話には、非利き手または体の一部（腕や胸）との接触が必要である（図4）。あごより上（頬やこめかみなど）で表出される手話表現の場合は、身体的接触は必要ない（図5）。あご周辺的位置は身体的接触の有無が決まる「境界」としての役割を果たしていると考えられる。身体的接触がない手話表現には移動を伴わない反復的な動き（前後または回転）が伴う傾向がある（図6）。

分析：両手手話はバチソンの制約のような音韻的制約に従う限り容認されるが、片手手話は位置によっては身体的接触が必要とされる傾向がある。具体的には、表出位置が下がるほど、身体的接触が必要となる。身体的接触は視覚的な知覚のしやすさ(salience)を増幅させると考えられている (cf. Sandler and Lillo-Martin 2006)。本研究で観察されたパターンは、手話表現が上部・中央の位置（顔の周辺）で表されるほど知覚のしやすさが増すと考えれば説明がつく。ネイティブサイナーが用いるかな文字由来の手話表現もまた、音韻的制約にしたがうことが示唆された。

参考文献: Battison, R. (1978) *Lexical borrowing in American Sign Language*. (Reprinted in 2003) Burtonsville, MD: Linstok Press. / Brentari, D, and C. Padden. (2001). Native and foreign vocabulary in American Sign Language: A lexicon with multiple origins. In D. Brentari (ed.) *Foreign vocabulary in sign languages*, New York: Psychology Press. 87-120./ Liddell, S. K. (1984) THINK and BELIEVE: sequentiality in American Sign Language. *Language* 60:2, 372-399. / Padden, C. (1998). The ASL lexicon. *Sign language & linguistics* 1.1, 39-60./ Sandler, W., and D. Lillo-Martin. (2006) *Sign language and linguistic universals*. Cambridge University Press.

図1：指文字とそれに対応するかな文字

N	WA	RA	YA	MA	HA	NA	TA	SA	KA	A
		RI		MI	HI	NI	TI	SI	KI	I
		RU	YU	MU	HU	NU	TU	SU	KU	U
		RE		ME	HE	NE	TE	SE	KE	E
	(W)O	RO	YO	MO	HO	NO	TO	SO	KO	O

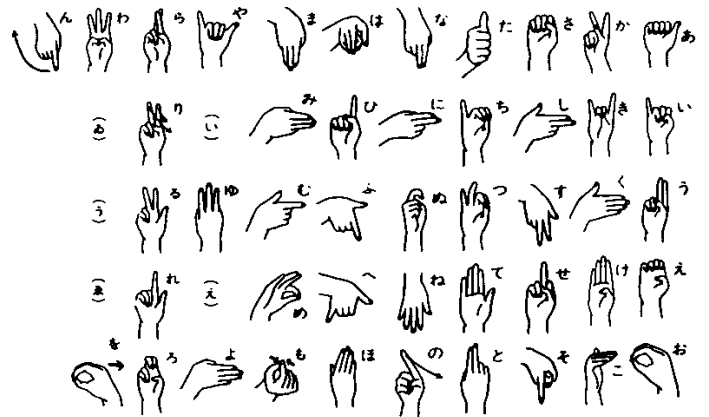


図2：両手手話（対象的な動き）



歌う（指文字ウ）

図5：上の位置で表されるかな文字由来の手話表現、接触なし



知識（指文字チ）

図3：両手手話（利き手主体）



ストレス（指文字ス）

図6：接触なしのかな文字由来の手話表現、あご位置、回転あり



トマト（指文字ト）

図4：下の位置で表されるかな文字由来の手話表現、接触あり



気持ち（指文字キ）